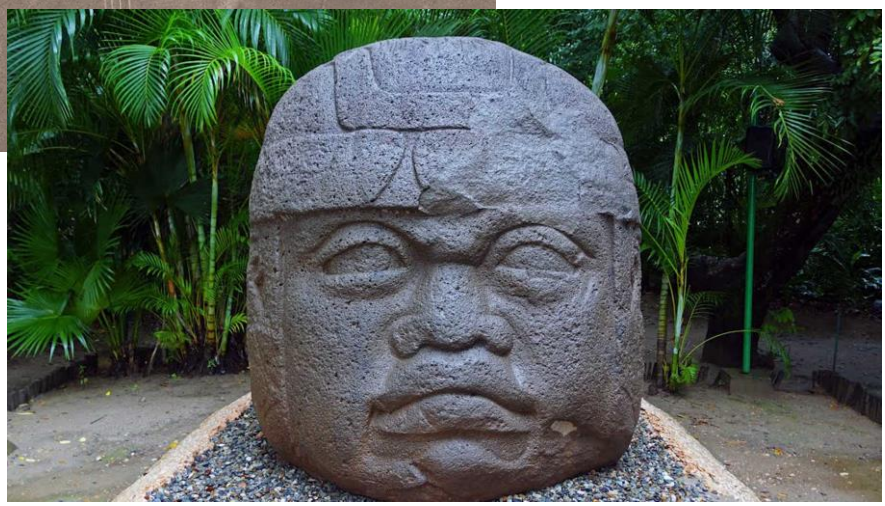
KANSAI GAIDAI UNIVERSITY
イベロアメリカ研究センターニューズレター　vol.7（2017）

IMÁGENES DE IBEROAMÉRICA

El CENTRO DE ESTUDIOS IBEROAMERICANOS



目次

公開講座

2017 年 関西外国語大学連続公開講座
「古代への情熱 ―米大陸アーケオロジーの最前線―」（全 3 回）

第 1 回（2017 年 11 月 10 日）
青山 和夫 （茨城大学人文社会科学部）
「マヤ文明の研究の最前線と魅力」
AOYAMA, Kazuo (College of Humanities and Social Sciences, Ibaraki University)
Fascinación con la Civilización Maya y su estado actual
..... 1

第 2 回（2017 年 11 月 20 日）
坂井 正人 （山形大学人文社会科学部）
「世界遺産ナスカの地上絵 ―最近の研究成果をめぐって―」
SAKAI, Masato (Faculty of Literature and Social Sciences, Yamagata University)
La investigación arqueológica reciente en las líneas y geoglifos de Nasca, el patrimonio mundial de la UNESCO
..... 7

第 3 回（2017 年 11 月 29 日）
伊藤 伸幸 （名古屋大学大学院文学研究科）
「メソアメリカ文明の先古典期文化 ―オルメカ文化を中心に―」
ITO, Nobuyuki (Graduate School of Letters, Nagoya University)
Los Olmecas durante el periodo preclásico en Mesoamérica
..... 11

関西外国語大学公開講座（2017 年 6 月 14 日）
浜田 満 （株式会社 Amazing Sports Lab Japan）
「サッカービジネスほど素敵な仕事はない ―たった一人で挑戦した FC バルセロナとのビジネス―」
HAMADA, Mitsuru (Amazing Sports Lab Japan Inc.)
No hay otro negocio mejor que el fútbol: Mi desafío personal negociando con el FCBarcelona
..... 16

スペイン語教授法研究会例会

第 10 回スペイン語教授法研究会 ―第 10 回記念講演会―（2017 年 7 月 22 日）
野田 尚史 （国立国語研究所）
「リーディングのためのスペイン語の主語・主題・語順 ―日本語との対照から―」
NODA, Hisashi (National Institute for Japanese Language and Linguistics)
El sujeto, el tema y el orden de las palabras para la lectura en español: Un enfoque contrastivo con el japonés
..... 18

2017 年 関西外国語大学連続公開講座
古代への情熱 ―米大陸アーケオロジーの最前線―（全 3 回）

第 1 回
マヤ文明の研究の最前線と魅力

青山 和夫 （茨城大学人文社会科学部）

Fascinación con la Civilización Maya y su estado actual

AOYAMA, Kazuo
College of Humanities and Social Sciences, Ibaraki University

RESUMEN

La Civilización Maya floreció en el sureste de México, Belice, Guatemala y el oeste de Honduras entre 1000 a.C. y el siglo 16. Los mayas desarrollaron una civilización urbana muy sofisticada en base a la tecnología neolítica. El Proyecto Ceibal-Petexbatun ha investigado el sitio arqueológico Ceibal en Guatemala desde 2005. En la presente conferencia, se van a presentar los resultados de dichos estudios. (27/6/2017 Kazuo Aoyama)

インターナショナル・コミュニケーション・センター ICC ホールにて

1. 誤解だらけのマヤ文明

多くの日本人は、マヤ文明という名前を聞いたことがあるだろう。しかし、マヤ文明には誤解が多い。 その要因の一つは、世界史の教科書において西洋人が侵略する前のアメリカ大陸の記述が質量ともに極めて貧弱なことが挙げられる。マスメディアが流すマヤ文明の情報には、真っ赤なうそも多く含まれている（青山 2012a)。たとえば、「マヤ人が毎日のように神に生け贄を捧げていた」というのは、スペイン人が植民地化を正当化するためにおおげさに話したのに過ぎない。「謎の水晶ドクロがマヤ遺跡から見つかった」という言説も真っ赤なうそである。それは、19 世紀にドイツでつくられた。「マヤ人は人類滅亡を予言した」というのもデマである。マヤ人はそのような予言をせず、マヤ暦で新たな時代が始まったのである。いわゆる「宇宙飛行士を描いたマヤの石板」は、亡くなった王が地下の世界に旅立つ様子を表象している。

セイバル遺跡を発掘中の青山氏とマヤ人の発掘作業員

2. 世界六大文明の古代アメリカの二大文明

マヤ文明に代表されるメソアメリカとインカに代表されるアンデスは、旧大陸の諸文明と交流することなくアメリカ大陸で独自に生まれた一次文明であった（青山 2007; 関・青山 2005）。旧大陸の諸文明が相互に影響しながら展開したことを考えると、人類史における古代アメリカの二大文明の特異性は明らかである。コロンブスは 1492 年にアメリカ大陸を「発見」しなかった。世界の栽培種の 6 割以上は、アメリカ大陸原産である。たとえば、アメリカ大陸原産のトウモロコシ、トマト、トウガラシ、ジャガイモ、サツマイモやカボチャは、私たちの食生活を豊かにしている。作物だけでない。秋の代名詞のコスモス、クリスマスの季節に人気のポインセチア、ダリアやマリーゴールドなどアメリカ大陸原産の草花と共に、私たちの生活は古代アメリカ文明の遺産から多くの恩恵を受けている。

3. マヤ文明とは

マヤ文明が栄えた現在の国は、メキシコ、グアテマラ、ベリーズ、ホンジュラスである。マヤ文明が栄えた時期は、紀元前 1000 年頃からスペイン人が侵略した 16 世紀に及ぶ（青山 2013)。日本では、縄文時代の終わり頃から室町時代に相当する。マヤ文明の特徴とし

ては、①洗練された石器の都市文明、②多様な自然環境の文明、③統一王国がなかった、ネットワーク型の文明、④多神教、⑤マヤ文字（4 万～5 万）が挙げられる。スペイン人の侵略によってマヤ文明は破壊されたが、その末裔は 800 万人を超え、計 30 のマヤ諸語が話されている。マヤは、現在進行形の生きている文化なのである（青山 2015）。

4. マヤ文明の現地調査：グアテマラのセイバル遺跡

青山は、ホンジュラスのラ・エントラーダ地域と世界遺産コパン遺跡（1986～1995 年）、グアテマラのアグアテカ遺跡（1998～2007 年）とセイバル遺跡（2005 年～）などで現地調査を行ってきた。本講演では、セイバル遺跡の調査の主要な成果と意義について詳しく紹介する。

セイバル遺跡の層位的な発掘調査によって、マヤ文明の起源が従来の説よりも 200 年ほど早く、紀元前 1000 年頃（Inomata et al. 2013）にさかのぼることがわかった。公共祭祀を形作り物質化したイデオロギーは地域間交換や戦争など他の要因と相互に作用してマヤ文明の支配層の形成に重要な役割を果たした（Aoyama et al. 2017a）。先古典期中期（前 1000～前 350 年）に公共広場で繰り返し慣習的に行われた埋納儀礼を含む公共祭祀という反復的な実践は集団の記憶を生成し、中心的な役割を果たす権力者の権力が時代と共に強化された（Aoyama et al. 2017b）。セイバルの初期のマヤ権力者は、地域間交換に参加して、黒曜石や翡翠のような重要な物資、観念体系や美術・建築様式などの知識を取捨選択しながら交換して権力を強化した（Aoyama 2017a, 2017b）。

セイバル遺跡では居住の定住性の度合いが異なる多様な集団が、共同体の公共祭祀及び公共祭祀建築や公共広場を建設・増改築する共同作業によって社会的な結束やアイデンティティを固め、マヤ文明が発展したことがわかった（Inomata et al. 2015）。食料獲得経済から食料生産経済へ移行していく過程は数千年にわたったが、前 1000 年頃にトウモロコシの品種改良の過程で大きな転換点があった可能性が高い。大きな穂軸と穀粒を有する、生産性の高いトウモロコシが生み出され、農耕を基盤とする生業が確立した（Houston and Inomata 2009:74）。このことは、人骨の同位体分析や先古典期中期以降にトウモロコシの神の図像が増えることに反映されている。

航空レーザー測量（LiDAR）によって、1 万 5000 を超える考古遺構と考えられる地点を確認した（Inomata et al. 2017a）。航空レーザー測量と踏査によって、先古典期の 25 の儀式センター（太陽の運行に関連した儀式グループである計 11 の「E グループ」を含む）を確認した。先古典期と古典期の人間の居住は、水はけの良い高台に集中した。

セイバル遺跡の中心部と周辺部における大規模で精密な層位的な発掘調査、土器編年の細分化をはじめとする詳細な遺物の分析及びマヤ考古学では例外的に豊富な試料 154 点の放射性炭素年代を組み合わせて、高精度編年を確立した（Inomata et al. 2017b）。セイバル遺跡の高精度編年によって、精度の粗い従来のマヤ文明の編年では復元できない先古典

期の衰退（150-300 年頃）と古典期の衰退（800-950 年頃）のプロセスを検証した。その結果、セイバルでは前 75 年頃と 735 年頃から戦争が激化して政治的に不安定になり、都市が衰退し始めたことがわかった。

5. 古典期マヤ文明の盛衰と歴史的教訓

古典期マヤ文明（200～1000 年）は、「崩壊」しなかった。諸王朝が複数の要因（人口過剰、環境破壊、戦争等）の相互作用によって衰退した。マヤ低地南部では 8 世紀に総人口がピークに達し、農耕地や宅地の拡大によって森林が減少し、農耕によって土地が疲弊した地域が多かった。多くの都市が繁栄を極めた結果、その限界を超えて衰退した。

私たちは、マヤ文明の成功と失敗から歴史的教訓を学ばなければならない。マヤ低地南部の諸王は、当時の文化的バイアスに基づき、自らの権威を正当化し、神々の助けを請うために、巨大な神殿ピラミッドを建設し、更新し続けた。農業がさらに圧迫され、食料が不足し、戦争が激化した。古典期末の大神殿ピラミッドは、マヤ文明の黄昏時の始まりを象徴したといえよう。こうした傾向は、スケールや時代背景は全く異なるが、西洋科学文明の「進歩」や市場原理主義を追求した結果、「宇宙船地球号」が直面している現代の重大な危機（地球規模の環境破壊、先進諸国における農業人口の減少、地球人口の増大に伴う食料難や飲み水の不足、戦争やテロ）に酷似している（青山 2012a, 2012b）。

青山和夫氏

後古典期（1000 年～16 世紀）においても、諸王国が、スペイン人が侵略した 16 世紀まで興隆した。様々な王国が共存し、多様性を保つことが、マヤ文明の特色であった。強大な統一国家の場合、頂点が崩れると、社会全体が危機に瀕する。多様性は、社会の回復力（レジリアンス）を高めてくれる。マヤ地域には巨大な統一王国がなく、多様な王国が共存していたので回復力が高く、マヤ文明全体が崩壊することはなかったのである。

6. マヤ文明を学ぶ今日的意義

マヤ文明を学ぶ今日的意義として、以下の点が挙げられる。

①マヤ文明を学ぶことは、マヤ先住民の異文化理解に大いに役立つ。マヤ文化は、現在まで力強く創造され続けられている。マヤは過去の文化や歴史の総和であり、現在進行形の生きている文化伝統だからである。②マヤ文明が栄えたメキシコ・中央アメリカ諸国の歴史認識においても重要である。③「四大文明」・西洋中心史観を脱して、よりバランスの

取れた「真の世界史」の構築に貢献する。④人間の一生では観察できない数百年、数千年という時間枠の中で、いつ、どこで、なぜ、どのように、文明が盛衰したのかを検証して、成功例と失敗例から歴史的教訓を学ぶことができる。私たちが自らのバイアスを認識・超克して、新たなオプションを探求する鍵になりうる。⑤多様な王国が共存したマヤの事例は、多様性を保つことが、社会のレジリアンス（回復力）を高めることを教えてくれる。⑥マヤ文明は、文明のあり方、社会の持続可能な発展、都市化、文明と環境のかかわりなど、過去から現代社会について考察する機会を提供する。マヤ文明の盛衰は、「文明とは何か」という問題を私たちに問いかけている。

引用文献

Aoyama, Kazuo 2017a Ancient Maya Economy: Lithic Production and Exchange Around Ceibal, Guatemala. *Ancient Mesoamerica* 28(1):279-303.

——— 2017b Preclassic and Classic Maya Interregional and Long-Distance Exchange: A Diachronic Analysis of Obsidian Artifacts from Ceibal, Guatemala. *Latin American Antiquity* 28(2):213-231.

Aoyama, Kazuo, Takeshi Inomata, Flory Pinzón, and Juan Manuel Palomo 2017a Polished Greenstone Celt Caches from Ceibal: The Development of Maya Public Rituals. *Antiquity* 91(357):701-717.

Aoyama, Kazuo, Takeshi Inomata, Daniela Triadan, Flory Pinzón, Juan Manuel Palomo, Jessica MacLellan, and Ashley Sharpe 2017b Early Maya Ritual Practices and Craft Production: Late Middle Preclassic Ritual Deposits Containing Obsidian Artifacts at Ceibal, Guatemala. *Journal of Field Archaeology* 42(5):408-422.

青山和夫 2007『古代メソアメリカ文明—マヤ・テオティワカン・アステカ』講談社選書メチエ。

——— 2012a『“謎の文明”マヤの実像にせまる』NHK 出版。

——— 2012b『マヤ文明　密林に栄えた石器文化』岩波新書。

——— 2013『古代マヤ　石器の都市文明　増補版』京都大学学術出版会。

——— 2015『マヤ文明を知る事典』東京堂出版。

Houston, Stephen D. and Takeshi Inomata 2009 *The Classic Maya*. Cambridge University Press, Cambridge.

Inomata, Takeshi, Daniela Triadan, Kazuo Aoyama, Víctor Castillo, and Hitoshi Yonenobu 2013 Early Ceremonial Constructions at Ceibal, Guatemala, and the Origins of Lowland Maya Civilization. *Science* 340:467-471.

Inomata, Takeshi, Jessica MacLellan, Daniela Triadan, Jessica Munson, Melissa Burham, Kazuo Aoyama, Hiroo Nasu, Flory Pinzón and Hitoshi Yonenobu 2015 Development of

Sedentary Communities in the Maya Lowlands: Coexisting Mobile Groups and Public Ceremonies at Ceibal, Guatemala. *Proceedings of the National Academy of Sciences USA (PNAS)* 112(14):4268-4273.

Inomata, Takeshi, Daniela Triadan, Jessica MacLellan, Melissa Burham, Kazuo Aoyama, Juan Manuel Palomo, Hitoshi Yonenobu, Flory Pinzón and Hiroo Nasu 2017a High-precision radiocarbon dating of political collapse and dynastic origins at the Maya site of Ceibal, Guatemala. *Proceedings of the National Academy of Sciences* 114(6):1293-1298.

Inomata, Takeshi, Flory Pinzón, José Luis Ranchos, Tsuyoshi Haraguchi, Hiroo Nasu, Juan Carlos Fernandez-Diaz, Kazuo Aoyama, and Hitoshi Yonenobu 2017b Archaeological Application of Airborne LiDAR with Object-Based Vegetation Classification and Visualization Techniques at the Lowland Maya Site of Ceibal, Guatemala. *Remote Sensing* 9(6):563; doi:10.3390/rs9060563.

関雄二・青山和夫 2005『岩波 アメリカ大陸古代文明事典』岩波書店。

（2017/11/15 青山和夫）

第 2 回
世界遺産ナスカの地上絵 ―最近の研究成果をめぐって―

坂井 正人 （山形大学人文社会科学部）

La investigación arqueológica reciente en las líneas y geoglifos de Nasca, el patrimonio mundial de la UNESCO

SAKAI, Masato
Faculty of Literature and Social Sciences, Yamagata University

RESUMEN

Desde el año 2004 la Universidad de Yamagata ha realizado investigaciones en los geoglifos de Nasca inscritos como patrimonio mundial, incluyendo algunos de los más conocidos como el Colibrí, el Mono, y otros figurativos gigantes. Hasta el momento se han propuesto varias hipótesis para contestar las preguntas de cuándo, quién, para qué y cómo se construyeron los geoglifos. Explicaremos hasta qué punto se han aclarado estas cuestiones a través del resultado de nuestra investigación. Además, hablaremos sobre la situación actual de conservación de los geoglifos, las causas de su deterioro y al mismo tiempo las actividades de conservación que estamos ejecutando últimamente.

(2/8/2017 Masato Sakai)

ナスカの地上絵は南米ペルー共和国にあります。ペルーの首都リマは人口約 800 万人の大都市で、さまざまな階層の人々が住んでいます。また首都リマには日系人社会が存在し、ペルーと日本の文化交流のために建設された日秘文化会館、織物や土器などが多数展示されている天野博物館などがあります。そして、我々がいつもお世話になっている山形県人会もリマにあります。

リマからナスカまで、自動車で約 7～8 時間かかります。途中、道路の両側には砂漠が広がります。その砂漠の中に、人が住んでいるとは思えないような掘っ立て小屋が広がっている地区があります。これらは市街地の拡大に伴い建設されたものです。こうした掘っ立て小屋は、砂漠の中だけでなく、ナスカ市街地の近くにも数多く分布しています。

ナスカ市は、地上絵観光のメッカで、毎日世界中から観光客が集まります。飛行機でナスカ台地上を遊覧すると、コンドル、ハチドリ、クモ、サルなどの有名な動物の地上絵だけでなく、多数の直線や台形の地上絵を目にすることができます。

山形大学では 2004 年度から地上絵に関する学際的な研究（人類学・考古学・地理学・心理学・情報科学など）を実施しています。2012 年にはナスカ市内に山形大学人文学部附属ナスカ研究所を設立して、精力的に調査してきました。これまで人工衛星画像や航空写

真を活用して、地上絵の分布図を作成するとともに、現地調査を実施してきました。その結果、動物の地上絵を 50 点以上、直線の地上絵を 300 点以上発見しました。

2006 年には全長約 65mの動物の地上絵、2011 年には斬首された人間の頭部の地上絵（約 4×3m）、2013 年には斬首の場面の地上絵（全長 9m と 13m の人物像）を公表しました。そして、2014 年および 2015 年には、ナスカ市街地付近で、ラクダ科動物と想定できる地上絵（全長 3m～15m）を 40 点以上発見しました。2016 年にはナスカ台地の中央部で、全長約 30mの「舌を伸ばした動物」の地上絵が見つかりました。これら新発見の地上絵の大部分は面状の地上絵で、古いタイプの地上絵だと考えられています。

岩絵の前でナスカプロジェクトメンバーと

地上絵について多くの人が抱く疑問は、(1)「誰によって、いつ造られたのか？」、(2)「巨大な地上絵は本当に上空からしか形が分からないのか？」、(3)「どんな方法で制作されたのか？」、(4)「今まで壊されずに残ったのはなぜか？」 、そして (4)「何のために地上絵が制作されたのか？」です。これらの疑問について、どこまで解明されているのかについてお話しします。

現地調査中、地上絵の近くで、土器の破片がしばしば見つかります。この土器を作った人たちが、地上絵を描き、利用したと考えられます。そこで、地上絵の近くに残っている土器から、地上絵の製作年代もしくは利用年代を推定することができます。

先行研究では、ハチドリや猿のような巨大な動物の地上絵は、紀元前 200 年から紀元後 700 年のナスカ期に制作され、リャマのような小さな動物の地上絵は紀元前 400 年から紀元前 200 年のパラカス後期に制作されたと考えられてきました。

一方、直線の地上絵の制作年代に関しては論争がありました。山形大学の調査で直線の地上絵の近くで見つかった土器を分析したところ、紀元前 100 年頃から、スペイン人の征服者が到来した 16 世紀まで、これらの地上絵は利用されてきたことが明らかになりました。

ナスカの地上絵は、あまりにも巨大なので、上空からでなければ識別は不可能だと言われることがあります。しかし、地上からでも識別できる地上絵が存在します。それは宇宙飛行士もしくはフクロウ男と呼ばれる地上絵です。この地上絵は山の斜面に描かれているので、地上からでもその形が分かります。一方、有名なクモの地上絵は、地上からでは全

体像を見ることが出来ません。しかし、地上絵の周囲を歩き回れば、口や脚などの部位の配置から、どのような動物が描かれたのかが分かります。

地上絵はどのように造られたのでしょうか。台地上に黒い砂利のような石が広がっています。黒い石を取り除くと、すぐ下に白い地面が現れます。つまり線状や面状に石を取り除くと、黒い台地に白い線や面が出現します。石はだいたい握りこぶし程度の大きさなので、除去するのは簡単です。

ではどうやって大きな絵を描いたのでしょうか。小さな絵を描いて、拡大して、巨大な絵を制作したのでしょうか？　相似拡大の原則を使えば、大きな地上絵を描くことができます。実際に試してみると、100mくらいのハチドリの地上絵は、2～3 時間もあれば描けます。

ナスカ台地の近くで調査中に、最近描かれた全長 80 メートルの聖母チャピの地上絵を見つけました。この地上絵は 21 世紀になって二人の女性によって描かれました。制作時間はわずか 30 分程度です。相似拡大法よりも、ずっと早く描くことができるのです。どうやって描いたのかを尋ねたところ、元の図像を頭の中で拡大して、目視と歩幅で距離・角度を測ることによって描いたという説明を受けました。実際に描けるのかどうか確かめるために、キツネの絵を描くようにお願いしました。すると、女性二人で全長 20mのキツネの地上絵を 15 分で描いてくれました。その後、彼女たちのやり方を日本でも試してみました。例えば 100mのハチドリの地上絵を小学生に描いてもらいましたが、1 時間くらいで完成しました。

地上絵が描かれたナスカ台地には、山に降った雨が流入することによって、谷が形成されます。しかし、動物の地上絵が描かれた地区には、こうした雨水は流入しません。もし水の影響を受ける場所に地上絵を描いた場合､動物の地上絵は水で破壊されてしまいます。そこで、今日まで地上絵が破壊されずに残ったのは、水の影響を受けない場所を選んで、描かれたためであることが、環境地理学者の研究によって明らかにされました。

地上絵の制作時期・方法についてはずいぶん分かってきました。しかし、何のために地上絵を描いたのかについてはまだ十分解明されていません。先行研究者たちは、豊作を祈願して地上絵は制作されたと主張しています。当時のナスカは農耕社会です。しかし、ナスカにはそれほど雨が降らないため、農耕に必要な水は山の雨に依存していました。山に雨が降り、川や地下水として、水がナスカに来るように願って地上絵を描いたというのはありそうなことですが、物的証拠と十分な説明が不足しています。

山形大学調査団によって発見された地上絵（面状）によって、地上絵の制作目的は、どこまで分かったのでしょうか。面状の地上絵は制作技法によって 4 つのタイプ（A～D）[注] に分けることができます。A タイプと B タイプはナスカ台地の平坦部に分布しています。一方、C タイプと D タイプはナスカ台地の北東に広がる山裾に分布しています。そして、これらの地上絵の付近には古道が分布しているので、ナスカ台地を移動する際の道標とし

て、見るために制作されたと考えられます。

過去半世紀の地上絵の破壊状況を人工衛星画像と航空写真を用いて調査したところ、市街地化によって、最近の10年間で地上絵の破壊が進んでいることが明らかになりました。こうした状況に対処するために、ペルー文化省と山形大学の間で地上絵の保護を推進するための特別協定が締結されました。

この協定にもとづいて、2014年と2015年に山形大学が発見したラクダ科動物の地上絵が集中的に描かれた地区を、遺跡公園化する作業が進められています。これらの地上絵（40点以上）はナスカ市街地のすぐ近くに集中的に分布しているため、ナスカ市近郊における近年の開発や不法占拠によって、リャマの地上絵が破壊される危険性があるからです。

リャマの地上絵は山の斜面に描かれており、本来は地上から見るために制作されたと考えられます。しかし地上絵内部に土砂や石が入り込んだため、経年劣化のため、可視性が低くなっており、地域住民には、2014年の発見までその存在が知られてきませんでした。地域住民にとって、見ることができない地上絵はインパクトに欠け、保護の対象となりにくいのが現状です。これらの地上絵を不法な開発や市街地化から守るためには、その文化遺産としての価値を地域社会全体で共有してもらうことが必要です。そのためにも、これらの地上絵の可視性を高めて、地域住民が日常的に見ることができる状態にすることは不可欠です。山形大学調査団では、オリジナルの地上絵を残した状態で、可視性の高い地上絵を実現することを目指しています。

現在、リャマの地上絵を保護するための手法を確立するために、日本の保存科学の専門家を中心に実験を行なっています。この実験には地元ペルーの遺跡保存の専門家も参加しています。これらの実験の成果にもとづいて、リャマの地上絵を保護するための手法を確立することが今後の課題です。

坂井正人氏

[注] Aタイプ　絵柄を白抜きにして、黒くしたい部分に石を積み上げる。
Bタイプ　絵柄の外側の石を取る。
Cタイプ　絵柄の輪郭部分の石をとる。
Dタイプ　絵柄の中を白抜きにする。

（2017/12/25 坂井正人）

第 3 回

メソアメリカ文明の先古典期文化 ―オルメカ文化を中心に―

伊藤 伸幸 （名古屋大学大学院文学研究科）

Los Olmecas durante el periodo preclásico en Mesoamérica

ITO, Nobuyuki

Graduate School of Letters, Nagoya University

RESUMEN

En Mesoamérica se creó la estructura monumental antes del pleno inicio de la sociedad agrícola por los olmecas. Durante la época de la cultura olmeca, construyó una de las primeras ciudades mesoamericanas. También es posible que se aprovechó la tecnología civil de los olmecas para arreglar el campo de cultivo en los periodos posteriores. De hecho, hicieron las esculturas gigantes, las cuales se heredaron a las culturas posteriores, modificando el concepto escultórico. En la civilización maya, se inició una combinación escultórica de “Estela-Altar” para realizar su actividad propia de los rituales o políticos. Sin embargo, por los olmecas se inició a esculpir la estela con una escena mitológica y altar-trono como prototipo del altar de los mayas para realizar actividades política y religiosa. (27/7/2017 Nobuyuki Ito)

はじめに

古期（紀元前 7000～前 2000 年）から先古典期（紀元前 2000～後 200 年）にかけての約 7000 年間に古代メソアメリカ文明の基礎がつくられた。古期のはじめに植物の栽培化が始まり、やがてトウモロコシ、マメ、カボチャなどの栽培植物により農耕の基礎が整うと各地方で文明の萌芽がみられた。そして、オルメカ文明がメキシコ湾岸地方を中心に成立した。

ピラミッド神殿の実測に取り組む名古屋大・滋賀大・東海大・エルサルバドル技術大学の学生たち

1. オルメカ文明の中心とその周辺

（1）オルメカ文明の中心地：メキシコ湾岸地方

ベラクルス州南部からタバスコ州にかけての地域は、オルメカ文明の中心地域として栄えた。生業については、採集・狩猟・漁撈が行われた。また、農耕もあった。先古典期前期（紀元前 1600 年頃）より儀礼の痕跡がみられ、真水が湧き出る池にある祭祀遺跡エル・マナティでは木彫、ゴム球、石斧などが出土した。

オルメカ文明は、サン・ロレンソ遺跡で初めて形になった。オホチ期（紀元前 1500～1350 年）、メソアメリカ南東部太平洋岸やメキシコ中央部、メキシコ西部との交流がみられたが、最盛期（サン・ロレンソ期／紀元前 1150～900 年）には、メキシコ中央部、オアハカと交流が強くなった。また、巨大な石彫がつくられた。そして、ナカステ期（紀元前 900～700 年）にはメキシコ中央部、マヤ中南部と関連ももちつつ、新しい要素が現れた。しかし、殆ど建設活動が止まった。原因として、戦争、疫病、気候変動などが挙げられている。

ラ・ベンタ遺跡は、サン・ロレンソ遺跡後のオルメカ文明の中心遺跡である。先古典期前期バリ期（紀元前 1800～1400 年）の居住の痕跡がみつかった。紀元前 1000 年頃になるとオルメカ文明の特徴があらわれ、紀元前 600 年には放棄された。ラ･ベンタ期前期（紀元前 1050～800 年）には、複数の建造物から成る建築複合がつくられ始め、ラ･ベンタ後期（紀元前 800～500 年）には大規模な建造物もつくられた。

トレス・サポテス遺跡は、ラ・ベンタ放棄後、石彫などに、オルメカの伝統が引継がれた。先古典期後期に建造物の建設が始まり、古典期に続いた。巨石人頭像や 7 バクトゥンの日付（紀元前 32 年）を持つ石碑などがある。

（2）周辺地域：メキシコ中央部、ゲレロ州、メソアメリカ南東部太平洋側

メキシコ中央部

ソアピルコ遺跡では、古期の終わり（紀元前 2300±100 年）に土偶がつくられた。しかし、その後の土偶の発展段階は不明である。コアペスコ期からアヨトラ期にかけて（紀元前 1150～1000 年頃）オルメカ文明の影響がみられるが、マナンティアル期（紀元前 1000 年頃）になるとその影響は消える。

チャルカツィンゴ遺跡は、メキシコ中央部モレロス州にある。アマテ期（紀元前 1500～1100 年）には、川原石を葺く建造物がつくられた。バランカ期（紀元前 1100～700 年）にはテラスが造成され、球戯場がつくられた。カンテラ期（紀元前 700～500 年）に最盛期となり、石造建造物やオルメカ様式の石彫が多くつくられた。

ゲレロ州

プエルト・マルケス遺跡ではメソアメリカ最古（紀元前 2440±140 年）を示す土器が出土したが、その後に続く土器文化は不明である。先古典期前期に土製建造物がつくられ始

めたが、その後、石造建造物とオルメカ様式の石彫がつくられた。洞くつに多彩色のオルメカ様式の壁画が描かれた。また、メソアメリカ最古の擬似アーチを持つ墓室がみつかった。

メソアメリカ南東部太平洋側

太平洋岸ソコヌスコ地域ではバラ期（紀元前 1550～1400 年）に非常に洗練された土器が出現した。ロコナ期（紀元前 1400～1300 年）には、大型楕円形土製建造物とメソアメリカで最も早い球戯場がつくられた。クアドロス期（紀元前 1000～900 年）は、初期のオルメカ的な要素が出現した。続くホコタル期（紀元前 900～850 年）には、太平洋側地域とチアパス高地そしてメキシコ湾岸南部との交流があった。先古典期中期のコンチャス期（紀元前 850～650 年）に、メキシコ湾岸からエル･サルバドルにいたる海岸部を中心に、オルメカ様式の石彫が広がった。高地からマヤ中部低地に至る斜面では、オルメカ様式の浮彫りや小像頭部が出土した。先古典期後期、初期マヤ様式石彫が出現した。高地では、ディリ - エスカレラ期（紀元前 900～400 年）に、大きな建設活動が確認される。この時期、他のマヤ地域との交流が始まり、オルメカ文明の要素がみられた。一方、太平洋側中腹部にあるタカリク・アバフ遺跡ではオルメカ様式の石彫がつくられた。また、メソアメリカ南端チャルチュアパ遺跡で、オルメカ様式の浮彫りがつくられた。

2. オルメカ文明の影響が少ない地域の先古典期文化

（1）メキシコ西部

先古典期前期に属する遺跡が、主に海岸地帯に立地し、コリマ、ハリスコ、ナヤリ州にみられる。この地域に特徴的な竪坑墓はエル・オペニョ遺跡が最も古く、紀元前 1500 年とされる。単純に穴が掘られた竪坑墓もあるが、ときには竪坑墓の上に建造物がつくられた。次のサン・フェリッペ期（紀元前 800～300 年）は、徐々にチャパラ湖周辺に竪坑墓文化が広がった。アレナル期（紀元前 300～紀元後 200 年）には、円形の中庭を囲むように建造物が配置され、7～10km ぐらい離れたところに 2km 径の居住区があった。ヒスイ製品、トルコ石製品などが供えられた竪坑墓は、円形建造物内若しくは近くにつくられた。

（2）オアハカ

オアハカ盆地では、先古典期後期にはモンテ・アルバン遺跡を中心とした勢力が生まれた。古代メソアメリカ文明を代表する初期文明の一つである。この地域における文明への始まりは、集落遺跡にみられる。

先古典期前期のエスピリディオン期（紀元前 1900～1400 年）、テワカン峡谷のプロン期（紀元前 2300～1500 年）よりやや遅れて土器がつくられ始め、定住化が始まった。ティエラス・ラルガス期（紀元前 1400～1100 年頃）には、メキシコ盆地、テワカンと交流がみられ、メキシコ湾岸南部、チアパス州太平洋側とも、一部関係があった。また、オルメ

カ文明の中心都市ラ・ベンタと同じ西に 8°傾いた基線に従って、公的建造物が方形基壇の上に建てられた。紀元前 1100 年頃のサン･ホセ期には、メキシコ盆地、メキシコ湾岸からマヤ地方まで交流が広がった。ピラミッド基壇や石彫もつくられ、遠隔交易や社会の階層分化も始まっていた。その後、グァダルーペ期（紀元前 850～700 年）にピラミッド基壇が拡張され、ダムや水路がつくられた。ロサリオ期（紀元前 700～500 年）には文字が出現し、モンテ・アルバンⅠ・Ⅱ期（紀元前 500～100 年）にはモンテ・アルバンが都市活動を開始し、初期国家に成長する。

（3）ワステカ：メキシコ湾岸北部、パヌコ川流域

先古典期前期チャヒル期（紀元前 1700～1400 年）には、メキシコ中央部、タマウリパス、チアパス太平洋側部と類似点がある。プハル期（紀元前 1400～1050 年）はメキシコ湾岸、メキシコ中央部、テワカン、メソアメリカ南東部太平洋側と交流がある。チャカス期（紀元前 1050～900 年）にはメキシコ中央部と、タンパオン期（紀元前 900～650 年）は、オルメカ文明の要素がみられ、メキシコ中央部、ベラクルス州南部、チアパス州の文化の影響を強く受けた。

伊藤伸幸氏

3. マヤ文明の始まり：グァテマラ高地とマヤ中部低地

（1）グァテマラ高地

この地域の中心となるカミナルフユ遺跡では、オルメカ文明の影響がほとんどみられない。アレバロ期（紀元前 1100～1000 年）に、居住が始まった。ラス・チャルカス期（紀元前 1000～700 年）には、土製建造物や大きな石彫がつくられた。ラス・マハダス期（紀元前 700～紀元後 650 年）は、オアハカとの交流を示す玄武岩石柱の浮彫り、メキシコ湾岸オルメカとの交流を示すヒスイ製品なども出土した。プロビデンシア期（紀元前 650～400 年）は、メソアメリカ南東部太平洋側高地から太平洋側斜面にその影響が広がった。ベルベナ、アレナル期（紀元前 400～100 年）には、マヤ中部低地、メソアメリカ南東部太平洋側に広くその影響が及んだ。土製建造物が立ち並ぶ都市となり、建造物内部に王墓と考えられる墓や大規模な水路がつくられ、石彫に文字も浮彫りされた。

（2）マヤ中部低地

スワジ期（紀元前 1200～900 年）では、中庭を囲む低い基壇が確認される。マモン期（紀

元前 700～前 400 年）には、側面に大きな仮面装飾のあるピラミッド神殿がつくられた。オルメカ文明の要素がある土器や石彫などが出土した。

チカネル期（紀元前 400～紀元後 200 年）には、エル・ミラドール遺跡において、神殿正面に色漆喰の大きな仮面装飾が施された石灰岩の切石が使われたアクロポリスやピラミッド神殿をつくった。大きな基壇の上に神殿を乗せた 70m 高の建造物を初めて建設した。サン・バルトロ遺跡では、オルメカ様式を持つ先古典期後期の壁画が描かれた。この時期、古い建造物を覆うように、新しい建造物をつくった。石碑も立てられ、石灰岩の切石を使うようになる。供物が石碑や建造物に捧げられ、複数の人身犠牲も行われた。

4. オルメカ文明とマヤ文明

メキシコ湾岸に中心を持つオルメカ文明は、狩猟採集に少し農耕が加わった生業を基盤とし、海・川・沼に近い熱帯雨林のジャングルに囲まれた沼沢地の文明であった。そこではマヤ文明よりも先に都市をつくり、文字や暦も使っていた。一方、その影響がみられる高地のゲレロ州では壁画も描いていて、洞くつ信仰に関する儀礼を行っていた。権力者の墓にはマヤ建築に多用される疑似アーチをメソアメリカで初めてつくった。さらに石碑や祭壇を政治や祭祀に使っていた。

先古典期前・中期にオルメカ文明地域で始まったさまざまな習慣は、先古典期後期にメソアメリカ南東部高地の大都市カミナルフユで初期マヤ文化に姿を変え、北側斜面を通り、マヤ中部低地に下って行った。そして、マヤ文明を形成する基礎の一部となった。また、オアハカやメキシコ西部地方にもオルメカ文化の要素がみられ、オルメカ文明との交流があった。しかし、これらの地方では、オルメカ文化との交流をしつつも独自の文化を形成していった。

（2017/12/25 伊藤伸幸）

関西外国語大学公開講座

サッカービジネスほど素敵な仕事はない
―たった一人で挑戦した FC バルセロナとのビジネス―

浜田 満 （株式会社 Amazing Sports Lab Japan）

No hay otro negocio mejor que el fútbol:
Mi desafío personal negociando con el FCBarcelona

HAMADA, Mitsuru
Amazing Sports Lab Japan Inc.

RESUMEN

Un joven que iba a estar a la deriva por la quiebra de la empresa donde trabajaba a sus 28 años, empezó a luchar por su mejor vida sólo con la pasión por el fútbol y el idioma español, y finalmente consiguió un gran contrato con FCBarcelona. Transcurridos los 13 años desde entonces, a partir de la entrada al FCBarcelona de Takefusa Kubo, quien había participado al FCBarcelona Camps, un campus de fútbol para niños organizado por él, sigue produciendo muchos eventos importantes como U-12 World Soccer Challenge que se celebró por primera vez en Japón.

Fútbol, idiomas, viaje, etc... ir acumulando las cosas que realmente te apasionan, al final se conectan entre ellos y te forman una vida perfecta. Cuando estás en el punto de bifurcación en la vida, ¿con qué criterio eliges las cosas para el mejor camino? Es una historia que uno rueda su vida positivamente. (3/4/2017 Mitsuru Hamada)

マルチメディアホールにて

本学イベロアメリカ研究センター主催の公開講座が 6 月 14 日、中宮キャンパスのマルチメディアホールで開かれ、「サッカービジネスほど素敵な仕事はない～たった一人で挑戦したFCバルセロナとのビジネス～」をテーマに、株式会社「Amazing Sports Lab Japan」代表取締役、浜田満氏が講演しました。学生のほか市民など計約 200 人が聴講しました。浜田氏は本学のスペイン語学科卒業。在学中からスペイン語、イタリア語、英語を実践的に学び、食品会社、商社、在外公館職員などを経てスポーツ関係の会社に勤めましたが、同社は入社約半年で経営破たん。人生の岐路でのチャレンジでは、語学力とサッカーへの情熱で、浜田氏が立ち上げた会社は FC バルセロナとの契約というビッグビジネスを実現しました。

講演では、自身の異色の経歴を振り返りながら、浜田氏の見出した人生のコツを 14 の箇条書きにして、解説しました。

「経験からしか新たなものは生み出せない」と「自己投資がすべて。数倍になって返ってくる」では、職を転々としたり、取引先の無茶な要求に応じたりしても、若い時のあらゆる経験・体験は、自分のためになると説明。

浜田満氏

また、「人生はらせん階段」の意味は、「失敗しても、しばらくするとまた同じ局面が巡ってくる。そのとき、自分が同じ高さをぐるぐる回っているのか、階段の上のステージにあがっているかで対応力が変わってくる」と意味を述べました。

最後の質疑応答で、学生から語学力をつける具体的な方法を問われ、「私の場合、映画のセリフをすべて日本語、英語で書き起こし、その後、映画を見ると、英語がよくわかりました」とコツを伝授していた。

（関西外国語大学ホームページより）

スペイン語教授法研究会例会

第 10 回スペイン語教授法研究会
第 10 回記念講演会
リーディングのためのスペイン語の主語・主題・語順 ―日本語との対照から―

野田 尚史 （国立国語研究所）

El sujeto, el tema y el orden de las palabras para la lectura en español: Un enfoque contrastivo con el japonés

NODA, Hisashi
National Institute for Japanese Language and Linguistics

RESUMEN

En español, las oraciones como “Juan vino ayer” y “Ayer vino Juan” expresan el mismo hecho, pero se usan en diferentes situaciones. Por otra parte, en japonés, “Yamada wa kinoo kita” y “Kinoo Yamada ga kita” expresan el mismo hecho, pero se usan en diferentes situaciones. En este artículo, analizamos qué indica el orden de las palabras en español, y “wa” y “ga” en japonés. Y para la lectura en español examinamos cómo considerar el sujeto, el tema y el orden de las palabras en español, en contraste con el japonés.

(1/6/2017 Hisashi Noda)

インターナショナル・コミュニケーション・センター ICC ホールにて

1. 主語と主題

スペイン語では，(1)の"Juan"も(2)の"Juan"も主語だとされる。どちらの文でも"Juan"が動詞"venir"の表す動作の主体であり，動詞の人称・数の形態を決めているからである。

(1) *Juan* vino ayer.

(2) Ayer vino *Juan*.

(1)と(2)に対応する日本語は，それぞれ(3)と(4)である。(3)では「フアン」という主語に「は」という助詞が付き，(4)では「が」という助詞が付いている。

(3) フアンはきのう来た。

(4) きのうフアンが来た。

日本語では，文の主題である主語には「は」が付き，文の主題でない主語には「が」が付く。「フアン」に「は」が付いている(3)は，「フアン」について「きのう来た」ということを述べている。「フアン」に「が」付いている(4)は「フアン」について述べているのではなく，「きのうフアンが来た」という出来事を述べている。

日本語のこのような違いは，スペイン語では語順の違いで表される。文の主題になっていると考えられる(1)の主語"Juan"は，動詞より前に置かれている。それに対して，文の主題になっていないと考えられる(2)の主語"Juan"は，動詞より後に置かれている。

ここではスペイン語と日本語の主題について対照し，スペイン語では主題は主に語順によって表され，日本語では主に助詞によって表されることを述べる。

2. 主題を持つ文

スペイン語でも日本語でも，主題を持たない文より主題を持つ文のほうがよく使われる。主題を持つ文は，主語などについてそれが何をしたかやどんな状態にあるかを述べるものである。スペイン語でも日本語でも，主語のほか，直接目的語や間接目的語も主題になることができる。

(5)は主語が主題になっているスペイン語の文である。この文は"Miralles"について"sonrió por primera vez"ということを述べている。この文では主語"Miralles"が主題になっており，"Miralles"は動詞より後ではなく前に置かれている。

(5) *Miralles* sonrió por primera vez. (Cercas. *Soldados de Salamina*. p.189)

(6)は(5)に対応する日本語の文である。この文では主語「ミラリュス」が主題になっており，「ミラリュス」に主題を表す助詞「は」が付いている。

(6) ミラリュスは、はじめてほほえんだ。(セルカス『サラミスの兵士たち』p.229)

(7)は直接目的語が主題になっているスペイン語の文である。この文は"el cuchillo"について"lo maneja muy bien"ということを述べている。この文では直接目的語"el cuchillo"が主題になっており，"el cuchillo"は動詞より後ではなく前に置かれている。

(7) *El cuchillo* lo maneja muy bien. (Bolaño. *Los detectives salvajes*. p.49)

(8)は(7)に対応する日本語の文である。この文では直接目的語「ナイフさばき」が主題になっており，「ナイフさばき」に主題を表す「は」が付いていている。

(8)　ナイフさばきは得意なんだから。　　(ボラーニョ『野生の探偵たち(上)』p.71)

(9)は間接目的語が主題になっているスペイン語の文である。この文は"la pobre Ada Elena"について"le dimos un calmante para que pudiera dormir"ということを述べている。この文では間接目的語"a la pobre Ada Elena"が主題になっており，"a la pobre Ada Elena"は動詞より後ではなく前に置かれている。

(9)　*A la pobre Ada Elena* le dimos un calmante para que pudiera dormir.

(Castellanos Moya. *Desmoronamiento*. p.83)

(10)は(9)に対応する日本語の文である。この文では間接目的語「哀れなアダ・エレーナ」が主題になっており，「哀れなアダ・エレーナに」に主題を表す「は」が付いていている。

(10)　哀れなアダ・エレーナには、精神安定剤をやって寝かせました。

(カステジャーノス・モヤ『崩壊』p.85)

間接目的語をともなう動詞の中には，主語ではなく間接目的語を主題にするのが普通の動詞がある。"gustar", "interesar", "faltar", "doler"のような，動作ではなく状態を表す動詞である。(11)は動詞が"gustar"の文である。

(11)　*A mi marido* le gustaba el mar.　　(Kawakami. *Manazuru*. p.10)

スペイン語では，直接目的語や間接目的語が主題になっている場合は必ずそれを指す接語代名詞が使われる。(7)では"el cuchillo"を指す"lo"が使われている。(9)と(11)ではそれぞれ"a la pobre Ada Elena"と"a mi marido"を指す"le"が使われている。

3.　主題を持たない文

スペイン語でも日本語でもすべての文が主題を持っているわけではない。主題を持たない文もある。主題を持たない文は，主語や直接目的語，間接目的語についてそれが何をしたかやどんな状態にあるかを述べるものではない。出来事を述べるものである。

(12)はスペイン語の主題を持たない文である。この文は"otros"について"ya vendrán"ということを述べているのではない。"ya vendrán otros"という出来事を述べている。この文では主語"otros"は主題ではないので，動詞より前ではなく後に置かれている。

(12)　Ya vendrán *otros*.　　(Mendoza. *La ciudad de los prodigios*. p.480)

(13)は(12)に対応する日本語の文である。この文では「別の男」は主題ではないので主題を表す「は」は付かず，主語を表す「が」が付いている。

(13)　そのうち別の男が現われる。　　(メンドサ『奇蹟の都市』p.318)

スペイン語でも日本語でも，主題を持たない文の述語は典型的には出現や発生，開始，存在，知覚を表す動詞である。(14)は発生を表す動詞が使われているスペイン語の主題を持たない文である。(15)は(14)に対応する日本語の文である。

(14)　En tiempos de guerra ocurren *cosas que son muy difíciles de explicar*, Daniel.
(Zafón. *La sombra del viento*. pp.50-51)

(15)　戦争の時代には、とても説明できないような出来事が起こるもんだよ、ダニエル。　(サフォン『風の影(上)』p.63)

日本語では, 主題を持たない文の述語は消滅や変化, 終了を表す動詞であることもある。(16)は消滅を表す動詞が使われている主題を持たない文である。

(16)　話をやめると老人の作り笑いが消えた。　(遠藤周作『沈黙』p.110)

こうした動詞が使われている文は, スペイン語では主題を持たない文になりにくい。(17)は(16)に対応するスペイン語の文である。この文の主語は動詞より後ではなく前にあるので，主題を持つ文になっている。

(17)　Cuando terminó de hablar, *la falsa sonrisa del viejo* se apagó.　(Endô, *Silencio*. p.101)

スペイン語で消滅や変化，終了を表す動詞が使われている文が主題を持たない文になりにくいのは，スペイン語では主題を持たない文の主語が動詞より後に置かれるからである。消滅や変化，終了の場合は，消滅したり変化したり終了したりする前に主語で表されるものがすでに存在している。そのため，主語は動詞より前にあるほうがわかりやすい。そうした理由から, 主語が動詞より後に出てくる主題を持たない文にはなりにくいのだろう。

野田尚史氏

4.　スペイン語のリーディングのために

スペイン語では主語が動詞の前にあっても後にあっても，動詞が表す動作の主体を表すことに関しては同じである。しかし，何を前提にして何を述べるかという情報構造に違いがある。主語が動詞の前にある文は，主語について主語がどうしたかを述べている。それと同じように，直接目的語か間接目的語が動詞の前にある文は，直接目的語か間接目的語についてそれがどうしたかを述べている。それに対して，主語が動詞の後にある文は，主語について主語がどうしたかを述べているのではなく，文全体で出来事を表している。

スペイン語の語順に見られるこのような情報構造の違いは，日本語と対照するとよくわかる。スペイン語で動詞の前にある主語，つまり主題になっている主語は，日本語では主題を表す「は」が付く。スペイン語で動詞の後にある主語，つまり主題になっていない主語は，日本語では主語を表す「が」が付く。

スペイン語のリーディングでは，こうした情報構造に注意することが必要である。その際，ここで述べてきたようなスペイン語の語順と日本語の助詞の対応関係を頭に入れておくとわかりやすい。

なお，さらに詳しいことは，スペイン語については Contreras (1976)，日本語については野田（1996），スペイン語と日本語の対照については野田（1994a，1994b）が詳しい。

参考文献

Contreras, Heles (1976) *A theory of word order with special reference to Spanish*. North-Holland.

野田尚史（1994a）「日本語とスペイン語の無題文」『日本語と外国語との対照研究 I　日本語とスペイン語(1)』pp.83-103，国立国語研究所.

———（1994b）「日本語とスペイン語の主題化」『言語研究』105，pp.32-53，日本言語学会.

———（1996）『「は」と「が」』，くろしお出版.

（2017/11/20 野田尚史）

編集後記

知力・体力・忍耐力の限界に挑む考古学と最新の科学技術が融合して生み出される成果に魅了された。仮説を証明し作業時間を短縮してくれる一方、定説が覆されることもある。これが「知のフロンティアを切り拓く」という営為なのであろう。研究者の「古代への情熱」が、文明を興し、やがて衰退させた古代人の姿を伝えてくれる。永遠の繁栄はない。しかし、場所を変え、時を経て必ず再生する人類のパワーは存在する。

野田尚史氏と浜田満氏の講演会も好評をいただいた。ひとえに多くの関係者の協力の賜物である。この場をかりて謝意を表したい。

イベロアメリカ研究センター長　林 美智代

2018 年 2 月発行

発行　KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

イベロアメリカ研究センター

〒573-1001 大阪府枚方市中宮東之町 16-1

TEL.072-805-2801（代表）

http://www.kansaigaidai.ac.jp